

熊による人的被害が過去最多となったという報道がされています。

今回はこの問題について考えてみたいと思います。

☆===== [時事解説] =====☆

OS018 と呼ばれた熊が駆除されました。北海道で牛 66 頭を襲った個体でした。この OS018 に関してまとまった報道が NHK の特集番組としてなされたので、ご覧になった方も多いかと思います。Web 上の記事として「OS018 の最期 “忍 者” はなぜ駆除された？第 2 の OS0 の可能性は？」（NHK WEB 特集 北海道）¹ として掲載されていますので、この記事ではこちらを参考に論を進めます。

この特集の中で、なぜ肉食のヒグマが現れたのか、という疑問が提起されています。もともと熊は草食性の雑食であり、ヒグマも例外ではありません。食性からすると狸に近いと言えるでしょう。そのヒグマが肉食を覚えたのは何故か。番組ではその答えとして OS018 特別対策班 藤本靖さんの言葉を紹介しています。

「非常に多くなったシカがクマの食べる木の実などを先に食べてしまう。食べるものがなくなったクマはシカの死体などに食事が変わっていった、その比率が高くなるとどうしても肉食化の傾向が強くなってしまふ。そのシカの管理をしっかり今後はしていかななくてはならないと思う」

シカの食害については林野庁が今年 7 月に発表した報告書²の中で次のように指摘しています。

近年、野生鳥獣による森林被害発生面積は減少傾向にあるものの、長期にわたるシカの生息数の増加及び生息域の拡大により森林の被害は深刻な状況にあり、全国の森林の約 2 割でシカによる被害が確認。

令和 3 年度のシカ被害発生面積は約 3.5 千ヘクタールで、野生鳥獣による森林被害の約 7 割を占めるとともに、シカの生息分布は 1978 年以降大きく拡大しており、2014 年までの 36 年間で分布域が約 2.5 倍に拡大するなど、深刻な状況。

ニホンシカが何を食べているのかという事については、「GIS で学ぶ野生動物・鳥類の生態」³というホームページに記述があります。同じサイトでクマが何を食べているのかを見てみると、主要な堅果類としてコナラ・クリ・ミズナラとあります。これらはブナの樹の仲間ですが、シカの食性とも重なります。

¹ <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230915/k10014195241000.html>

² 『森林における鳥獣害対策について』令和 5 年 7 月林野庁
<https://www.rinya.maff.go.jp/j/hogo/higai/attach/pdf/tyouju-37.pdf>

³ <https://www.inokumaaranuu.com/deerfoodhabitat/>

シカの場合、樹木の皮を食べてしまうのですが、樹皮を食べられた樹は枯れてしまいます。この結果クマの食べる木の実がなくなってしまうという事にもつながります。シカとクマが全く同じものを食べるというわけではありませんが、とにかくシカの数の増え方が尋常ではありません。

先の林野庁の報告書によれば、令和3年(2021年)のシカの自然増加率は約1.2、つまり1年間で20パーセントも生息数を増やしていることになります。これではクマが飢えてしまうのも無理からぬことでしょう。やむなくシカの死体などを食べることで、肉食化していくことになります。その結果生まれてきたのがOS018のような肉食のクマだったわけです。

日本の場合、これに加えて農業政策のまずさもあって、中山間地域の環境保全に支障が生じており、野生動物と人間社会の境界地帯である里山の管理ができなくなっています。その結果、人の住む町へのクマの出没も頻繁になって来ているわけです。肉食を覚えたクマが、人を獲物として認識するようになると、いわゆる人食い熊になってしまいます。

ここで指摘される重大な問題があります。それはクマの「食文化」が継承されるという問題です。2011年にロシアで発生した「ペトロパブロフスク熊事件」について報じた記事⁴によれば、「ペトロパブロフスク近郊は、人間がヒグマに喰われる事件が数年おきに発生する「危険地域」であり、「カムチャッカ半島における人喰い熊の出現確率は1000頭に1頭、0.1%と推定される」とのことです。こうした人喰い熊の効率の出現の背景について、執筆者の中山茂大氏は次のように述べます。

偶発的に人肉を味わうまでは、故意に人間を襲って喰うことはないはずだが、逆に一度、人肉の味を覚えたヒグマは、「人喰い熊」となって、連鎖的に食害事件を起こす可能性がある。

(中略)

一方、ペトロパブロフスク近郊で食害事件が多発しているのは、不幸にも、このような「人喰いの記憶」が、親から子へ受け継がれた結果なのではないか。

(引用ここまで)

人肉の味を覚えたクマは必ず駆除されなくてはならない理由がここにあります。さらに問題なのは、こうした「人喰い熊」という存在が、世界中に拡大しているという事実です。

⁴中山 茂大, "「お母さん、ヒグマが私を食べている!」と電話で実況…人を襲わない熊が19歳女性をむさぼり食った恐ろしい理由 人肉の味が親から子へ受け継がれている" PRESIDENT Online 2023/03/18 付 <https://president.jp/articles/print/67145>

日刊現代ヘルスケアの 11 月 4 日付記事⁵は次のように述べています。
北米では 1960 年代以降、人間とクマの衝突に関する研究が続けられてきました。特にクマの 2 つの行動、食物に対する条件づけと、人への馴れを阻止することの重要性が明らかになりました。こうした研究結果は政策に反映され、多くの人間とクマの命を救ってきました。
しかしこうした研究は、すべての生態系が安定していることが前提でした。科学ジャーナルで知られる非営利メディア「ザ・カンバセーション」への寄稿で、カナダのサスカチュワン大学のダグラス・クラーク教授はこう語ります。
「クマと人間の衝突の急激な増加の原因は食糧不足。私たちはこれを、気候変動による生態系の崩壊という“ニューノーマル”として考えるべきだ」
(引用以上)

つまり、先ほど日本のケースを考察しましたが、それ(シカの増殖による食害の拡大)にとどまらず、温暖化によるクマのえさの絶対的な不足という問題も考えておかなくてはならない、という事なのです。かつ温暖化の進行が止まらない限り、この傾向は今後も続き、常態化する怖れがあるという指摘がされているわけです。これは極めて深刻な事態だと言わざるを得ません。

この問題をさらに複雑にしているのが、クマの駆除に対する様々なクレームです。先ほどの NHK の記事でも紹介されていますが、05018 の駆除に対して、“釧路町には「かわいそうだ」「どうして駆除したのか」といった苦情が 20 件あまり寄せられた。その多くが道外からだったという。”との記述があります。野生動物の保護や自然との共生という、ある意味自然とともにあろうとする人々からの苦情だとも考えられますが、クマの保護を人命と天秤にかける事にはやはり疑問を感じざるを得ません。

こうした見解は、人間はクマを大切にしていける存在だという、言わば人類を自然の管理者であるかのように思い込んでいる、人類特有の傲慢な態度ではないかと思います。人類も、自然の有機的相互連携網の中の存在に過ぎないとする、謙虚な思考が求められるのではないのでしょうか。

この問題を根本的に解決しようとするれば、やはり自然環境の回復という問題を解決する必要があるというのが、私達の見解です。

その中には地球温暖化の阻止という課題も含まれますが、それと同時に生態系の調整機能の回復という課題も追及するべきだと考えます。

5

<https://www.msn.com/ja-jp/health/other/%E5%8C%97%E7%B1%B3%E3%81%A7%E3%82%82%E4%BA%BA%E9%96%93%E3%82%92%E8%A5%B2%E3%81%86%E3%82%AF%E3%83%9E%E3%81%8C%E5%A2%97%E5%8A%A0%E6%B0%97%E5%80%99%E5%A4%89%E5%8B%95%E3%81%AB%E3%82%88%E3%82%8B%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%8E%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%AB%E3%81%A8%E8%80%83%E3%81%88%E3%82%8B%E3%81%B9%E3%81%8D%E3%81%A8%E7%A0%94%E7%A9%B6%E8%80%85/ar-AA1kg7uS?o%E2%80%A6>

そのためには、いくつかの課題があります。

日本においては、(1)とりあえずシカの急速な増殖を抑える必要があります。また、(2)里山の管理を強化することなども急務です。ではそのためにはどのような方策が有効でしょうか。

まずシカの増殖抑制のために、現在考えられるのはオオカミの再導入だと考えます。かつて日本にもオオカミが生息していました。明治期にヨーロッパの価値観が導入される中で、オオカミについての誤った認識も導入されてしまい、オオカミは害獣と決めつけられて徹底的に駆除されてしまいました。しかし日本の森林の生態系の中で、上位の捕食者であったオオカミが絶滅したことで、シカなどの草食動物が増え始めたのです。この辺りの事情については日本オオカミ協会のウェブサイト⁶を参照いただきたいと思います。

大事なことは、オオカミを再導入することは、かつて日本に存在していた生態系を「復元すること」であって、「破壊すること」や「変容すること」ではないという事です。オオカミを導入すれば、彼らはまずシカの子どもたちを捕食するだろうと思われます。それによってシカの増殖は比較的速やかに停滞しはじめ、やがて緩やかに個体数の減少が始まり、自然に適正な生息数へと落ち着きはじめます。

重要なのは、そのプロセスに人が関与する必要があまりないという事です。人間が害獣として野生生物を駆除することに抵抗を感じる人も、野生動物の間での食物連鎖＝捕食活動によって野生動物の生息数が推移することには、抵抗を感じないで済むだろうと思われます。

一刻も早いオオカミの再導入を図るべきだと思います。

里山の管理の強化は政治的な課題です。これは本来もっとも容易いことの筈ですが、資本主義という経済制度の下では不可能事に近いものとなってしまっています。

対策の要は、中山間での農業従事者を増やすという事なのです。クマの生息する山奥と、人が経済活動に利用する農地の緩衝地帯として、里山を保全するための労働力の確保と言い換えてもいいでしょう。そのためには中山間地での農業経営が成り立つだけの経営的な保障をしなくてはなりません。つまり農産物の適正価格の保障が不可避の課題なのです。

ところがこの一事が、製造業に携わる資本家にとっては許容できない話となるのです。どういう事か。

農産物に対する適正価格の保障は、現在の農産物の価格の上昇となって現れます。それは必然的に労働者の生活費の高騰につながり、賃金水準を上げなくてはならなくなります。そのことは企業の利益率を低下させることになります。

⁶ https://jammin.co.jp/charity_list/200720-japan-wolf/

それを回避するためには、賃金の上昇分を自社製品の価格に転嫁(値上げ)するか、または利益率の低下(すなわち労働生産性の低下、あるいは搾取率の低下)を容認するかのいずれかを迫られることに直結することになります。それを経営者達は容認することができるでしょうか？

クマと人との共存(住分け)は目指すべきことです。ただし、それはここまで述べてきたような二つの課題を解決することが必須条件です。加えて本来のクマの生息環境の悪化防止という点では、地球温暖化の早急な対策が不可欠の課題として存在します。

しかしその為の社会的な政策の実施に当たっては、経営者の論理、すなわち資本主義そのものと訣別することが求められるのです。これが現在私たちに突きつけられているクマ問題の本質であることを理解していただきたいと思います。

☆＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝☆

◆＝＝＝＝ [コラム]＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝◆

ガザの人道危機はますます厳しい局面を迎えています。イスラエルのパレスチナ・アラブの人々に対する虐殺行為は世界の人々の怒りを呼び、最大の支援国アメリカ国内でも、若者たちを中心に抗議行動が繰り広げられています。ここにユダヤ人団体も加わってバイデン政権の方針をも転換させつつあります。

今日の事態について、当研究所はハマスの暴挙を奇貨としたネタニヤフ政権の権力維持のための戦争政策によるものと批判してきましたが、同時にハマスの側でも戦争政策が取られているという事を指摘する論調がありました。

プレジデント・オン・ラインの11月14日付に掲載された山崎雅弘氏の論考⁷では次のように述べられています。

実際の中東問題に置き換えて説明すると、「イスラエルのネタニヤフ政権(A国のb集団)」と「パレスチナのハマスの(B国のb集団)」は、形式的には敵対しており、理念の面でも決して相容れないという意味では「敵同士」に他ならないが、それと同時に「双方の対立関係」が常態化・恒久化することで、それぞれの国内での権力基盤をさらに盤石にできるという「利害の一致」が、いつしか生まれている。

(中略)

そして、現時点ではネタニヤフ政権もハマスも、対立関係の常態化・恒久化によって、政治的な発言力をさらに強め、穏健派の政治力を削ぐことに成功してい

⁷ [実はイスラエルとハマスの利害は一致している…陰惨な中東戦争が続いてしまうあまりに不条理な理由 \(プレジデントオンライン\) - Yahoo!ニュース](#)

る。
(引用ここまで)

こうした関係は対立的共依存と呼ばれるもので、もっとも戦争につながりやすい政治的状況だと言えます。

軍備亡国。武力を持つことで安全保障を図るという事は、実際には不可能なものです。なぜならその裏にあるのは、自らの権力を維持しようとする為政者の企み以外の何物でもないのですから。「軍事力なくして平和なし」などというミリタリー・ロマンチストの主張は、妄想以外の何物でもないことを改めて指摘しておきたいと思います。

◆=====◆

【活動報告】

『唯契の窓』 2023年冬号外(12月1日発行)を発行しました。200部を近隣住戸に配布しました。

三田市民病院の存続をめぐり、チラシの配布等を行いました。これに併せて、『唯契の窓』 2023年秋号外(9月1日付)を250枚配布しました。

【お知らせ】

現在、唯物論的社会契約論研究所のホームページの作成作業を進めております。2024年の開設を目標として準備中です。公開できるようになりましたら改めてお知らせいたします。

次回の発行は1月1日を予定しております。